

---

# ここに居ない、誰かへのレクイエム

thlaspi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ここに居ない、誰かへのレクイエム

### 【Nコード】

N3534E

### 【作者名】

thlaspi

### 【あらすじ】

何度も繰り返し返し見る、忘れたはずの女との淫らな夢。死んだ父親の消えない面影。そこに存在しなくても、その人たちはどこかに居る。

早朝、目覚める少し前に、昔付き合っていた里華の夢を見るようになった。里華の夢、と言ってしまつと、半分は嘘になってしまうのかもしれない。

いつも姿が見えるのは、俺の知らない女の人だ。顔は見えない。こちらを向いているのに、なぜだか顔が判らない。夢だから、顔が見えなくても知らない人だと判る。夢の中の俺はその人を里華だと思ひ込む。

その人は俺のペニスを手にとって、一度里華がしてくれたみたいに、一番「いい」ところを親指で愛してくれる。指の感触はよく分からない。ただ、「いい」気持ちにはちゃんとそこにあつて、打ち上げの瞬間へ向かつて着々と掻き立てられている。

俺は動くことができない。身体はそのまま固まつてしまつて、指を少し動かすことさえできず、彼女に「いい」気持ちのお返しをしてあげることができない。

彼女に触れ、中に入ってしまったら彼女は俺の前から去つてしまう。夢の中で、理由もなく俺はその事実を知っている。身も心も、その場に留まつて彼女に触れることを拒否している。

打ち上げの瞬間は迫る。「いい」気持ちは堪えきれないぐらいに高まつている。無理にでも身体を動かして中へ出すのか、それともこのまま空中へ放り出してしまふのか。

俺はどうすればいい？俺はどうすることだつて、できない。これは夢だから。

\*

いつもそこで目が覚める。

目が覚めた後に夢の実体は何も残らなくて、夢が打ち砕かれた後のキラキラとした破片だけが、まだ目の前の空間でなんとなく漂っている。窓ガラスを透過した朝の光が布団の脇の壁でゆらめいて動いているのをぼんやりと見つめつつ、はっきりとしない意識をそのまま成り行きで泳がせる、日曜日。

\*

朝だ。

夢の余韻を目の前にフラフラと漂わせつつトイレへ向かう最中、ダイニング・テーブルに、母親からのメモ書きを見つける。内容よりも出がけに慌てて書きなぐった風情がよく見て取れる。パート先のスーパ―はすぐ近所だけれど、惣菜売場の朝は普段からかなり早い。

それに今日は午後から早引けする分、午前五時半からの早出勤務にしたんだだろう。

そしてメモをじっくり解読するに、母曰く。

おとうさんのごはんたのみます。

お姉ちゃんと隆さんがお昼前に来るかもしれんから何か作ってあげてよ。

お供えと寿司とお坊さんに出すお菓子も買ってかえるから、法要のセットだけちゃんとしといて。たのむよ。

おうおう、必要とあらば何でも作ってやるけどさ。どうせ日曜は俺が晩飯作る当番だし。

しかし、隆さんの昼酒のあととその妻の、つわり中の妊婦が食べるものの両方の特徴を備えた食い物っていったい何だ？

おとうさんの法要

その一言が十年経ってもまださらっと書けない俺たち家族にだっ

て、今年ももれなく盆の時期は回ってくるのだ。

それからは時計の針がいつもより余分に速く回転する。着替えて自分の朝飯、母親が放ったらかした食器の片付け、隆さんが来ても何とが見せられるレベルまでは部屋を掃除しておかなくちゃならない。ダイニング・テーブルの下には、何年物だか判別のつかない梅酒や醤油のストックや貰い物の海苔の瓶なんかのごたごたと置かれて埃を被ったままになっている。ここに客を座らせるつもりなのか想像するだけで汗が流れる。母親の思う掃除とは目に見えるところだけをざっと拭いたり拭いたりすることを意味するようで、邪魔なものを退けてしまえばその下から恐ろしいほどの綿埃が湧き出してくる。

そうして家中をくまなく掃除してまわり、酒のあての下ごしらえまでをしっかりと済ませておく。

\*

親父に朝飯を供えてやれたのは、時計が十一時を指すちょっと前。悪いけれど、生きている人間の優先だから。

待たせた侘びに缶ビールを一本。一緒に飲める歳になったら、親父はもう居なかった。仏壇の前に置いたビールと、ときどきこうやって乾杯する。

親父は居ない。そこに置いたって誰もビールなんて飲まない。でも、俺たち家族はそこに居ると決めて三度の飯を用意し、毎日位牌の顔を拭いてやり、線香を焚いて鈴を鳴らして手を合わせ、ときどきあの世での無事を祈ってやる。

三十メートル近い高さから叩きつけたせいで完全に潰れた頭を見ているのに、もう戻れない鉄扉の向こうへ棺を見送ったのに、たまに疲れきっていてブーツといているときなんかに着や茶碗を多く並べすぎたり、うっかり今川焼を四人分買ってしまったり、誰もいな

い空間にふつと話しかけてしまったりしながら、少しずつ時間をかけて親父の存在を仏壇の中まで導いてきたんだ。

仏壇の前に座って、親父の存在と二人きりでビールを飲む日曜日。

メモだけ残して仕事に行った母親と、ずっと俺の心に居るのに手の届かないところへ行った里華と、適当に仏壇のあたりに居ると決めているけれど本当はどこにも居ない親父の存在の違いについて、少し深く考えてみたりする。

母親は仕事が終われば家に帰る。訊いてもいないのにひとりで喋りまくって、一日の不在を三十分で埋める。

里華は俺の元にはもう戻らないけれど、俺の知らないどこかでちゃんと生きている。もう逢えない。どこかで今を生きている里華と俺の心に居る里華の間には、少しずつ時間をかけて、まさにこの瞬間にも埋めがたい溝が横たわりどんどん広がり続けている。

時間の流れに一人取り残されている。どうすれば俺は前へ進んで行けるんだろう。心の中に住む里華にどう収まりをつければいいんだろう。まさか死んだ親父と同じように仏壇の中へ閉じ込めるわけにはいかないし。たとえ心の中に住む幻だとしても里華を殺したくない。仮に、何か代わりにひどい代償を引き受けなければいけないとしたって。

考えがだんだんとウェットな方面へ走り始めている。ちょっと酔いが回っているのかもしれない。汗と一緒に身体の水分がドツと噴き出す。筆筒からタオルを出してきて、急いで顔を拭う。

また仏壇の前へ戻って、気持ちと一緒に経机の上を整理する。線香にロウソクにマッチ、いつもここに置いてあるものを切らせていないか確かめて。忘れちゃならないお布施は用意した。仏壇の下引き出しから人数分の数珠を、押入れから座布団と小ぶりな木魚も出した。あ、それから外の物置にある廻り灯籠。

網戸のサッシを開けて庭に出ると、冷夏のせいかわ、遠くでずいぶ

ん気の早い蝸の声が聴こえた。肌を包むさらりとした熱気。ほとんど真上から降り注いで刺さる日差し。

長年の湿気のせいか染みだらけになった段ボール箱を抱え上げると、埃と湿気が混ざりあつて何かが燻っているような匂いがした。部屋へ戻つて左と右の箱を二つとも開け、仏壇の前に回り灯籠を据え置いて、ちゃんと動くかどうか試しにコンセントを刺してみる。

ふわりと回る、光の洪水。ド派手なピンク、蛍光がかった黄色、そして鮮やかすぎる空の色。目の前から居なくなった人間のためにいつまでも回り続ける極彩色。俺の目を捕らえて離さない後ろ向き  
の回転運動。今は忘れよう。もうすぐ俺の目の前に、今を生きる人間が二人……いや二人にプラス、姉貴のお腹の中の子もいるんだつた。とにかくまもなく訪ねて来るのだから。

台所に戻り、首に巻いたタオルで汗を拭きつつ、枝豆を茹でるための湯を沸かす。よく水洗いした枝豆に粗く塩を揉み込んで寝かす。ガスコンロの脇にビールの缶を置いて、たまにぐいっと一杯やりながら。

みんなが来る前に早めにクーラーのスイッチを入れて、時間があれば枝豆はよく冷やしておいてやるう。そうした方がつわりの喉にも通りがいいかもしれない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3534e/>

---

ここに居ない、誰かへのレクイエム

2010年12月16日14時08分発行